



園路の景1
芝生広場のほぼ中央を走る園路、維持管理のための軽自動車が行き通る。また園路の中央部分に芝生を張り、両サイドの芝生を視覚的につないでいる



園路の景2
曲線が広い芝生広場に動きとリズムを与えている



園路の景3
プライベート庭園に向かう園路の階段（砂利洗い出し仕上げ）



プライベート庭園に向かう園路の景
庭園奥の低地には、花壇があり季節のお花を楽しむことができる。そして人目を気にせずゆったりとした時間を過ごすためのプライベートな庭園でもある

デザインが意図したもの

一般に住宅庭園のデザインプロセスは、庭園となる空間を塀や生垣で囲い、どこから何をどう見るかといった視点場に注目しながら景の連続変化を有機的に繋ぎ合わせて、そこで発生する機能面や景観面についてのいろいろな問題を解決に導くことであると言える。

例えば、客間から隣家の立ち振る舞いが丸見えでは困るし、玄関までのアプローチはどこよりも安全で歩きやすくなるにはいけない。住宅も庭もお互いにバランスがとれていて、かつ価格的にリーズナブルであることも重要な要素だ。

ところで、庭園をデザインする場合に安全性、快適性、芸術性など細かいところまで検討し、バランスよく収めていくのはもちろんだが、特に庭園全体に流れる「空気」や「雰囲気」に注意を払うことが大切である。すぐれた庭園に一歩足を踏み入れた瞬間、ハッとすることがあるだろう。それは庭園全体に流れている雰囲気を観る側が読み取り感じた瞬間であり、とてもキリッとしていい気分になる。このような雰囲気はあらかじめ正確にデザインすることは難しい。しかし、日本庭園の場合、長年の時間経過がもたらしたしっとり感（時間美）と手入れ（維持管理）という不断の丹精によって、作庭当初にデザイナーが意図したある種のかたち（秩序世界）に庭園を誘導することができる。

このような観点から、今後、緑水荘庭園がここ独自の場所として立ち上がっていく雰囲気のようなものを作庭者らが発見もしくは予測して、さまざまなイメージを膨らませながら誘導を行い、その結果として数年を経て最終的に現代の「感性」のようなものを形作ることができれば、これはガーデニズム（庭の心）の1つの表現と言えるのではないだろうか。